平成27年(2015)
阿づまの光
8月号・Aŭgusto

五代教主作 灰釉茶盌 銘「大和三山・畝傍山」【聖地の土＋金字松釉】

題字 出口直日

通巻第557号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

お土からあがりし物を大切に
せざればこの世は治まることなし

出口王仁三郎聖師

「農（のう）」

祭務課主事　井畑　太

出口直日三代教主さまは、ご著書の中で「地についた生き方」と題して、次のようにお述べになっておられます。

「日本の立直しは、どうしても―農民を大切にすること―から始まらなければと思います。（中略）〝食〟というものが、私たちの人生にとって、人間社会にとって、どれだけ重要な地位にあるかは、誰でもがチョット考えてみれば分かることでありながら、実際には〝食〟について根本的なことがらが、あまり考えられていないのではないでしょうか。ことに食物をつくる〝農〟というものは、この現実において、何に先行させても考えるべきことがらでありましょう。

政治は、百姓を大切にしてこそ、ほんとうの正しい政治が行われるのです。農を中心にしてこそ、国の経済も文化も、本当に立直るものであることを、わたしはかたく信じます。

それには、現在、日本の農民の自覚ということも、たしかに必要でしょう。というのが、今の日本には、政治家として尊敬できる方は、数える程しかなく、政治屋のような人々が、自分の都合のよい時にのみ農民をおだて、チヤホヤして、そうされることに、農民が乗ってしまって、いつまでも駄目にされているということが言えるのではないかと思うからです。

いま時の政治家と称している人に、ほんとうに農民のことを考えていてくれる人が、いく人あるのかと思うとき、まず、農民自体に、自らの使命を自覚していただきたいことは、もちろんです。（中略）わたしは三十年も四十年も、農のために働いて来た農民へは、老後の〝恩給〟をさし上げるような時代がモウ来てよいと思います。

それくらい、農に生きるということは大変なことで、これは経験したことのない方には理解しがたい努力と経験と技術を要するものです。それは恩給の面のみでなく、国家が文化に対して功労のあった方を表彰する場合にも、わたしは、まず、その時代の立派な百姓におくるべきであると主張するものです」。（『私の手帖』から）

拝読させていただき、「農本主義」「農は国の大本（たいほん）」とのみ教えは、非常に奥深いことだと、再認識させていただいた次第です。

大本公開講座

霊界の実在と永遠の生命

～この世で学ぶ〝あの世〟の話～

大本教学委員
田辺謙二

語り継がれる死後の世界

日本人のどれくらいの人が、死後の世界を信じていると思いますか？　38％だそうです（日20・統計数理研究所）。昭和33年は20％だったので、50年で倍近く増えています。これは、予想外の数字でした。

エジプトでは、100％の人が死後の世界を信じています。同国に古代から伝わる『死者の書』には、死後の世界が説かれ〝閻魔役〟の神さまが生前の行いを秤（はかり）にかけて審判する様子などが記されています。

また、チベットにも『死者の書』が存在し、チベット仏教の経典になっています。死は、別の世界に行くためのプロセスの一つだと説いています。死後の世界については、古今東西、語り継がれているようです。

出口日出麿尊師は「死後に霊魂が個性をもって存続するということは、今日の次に明日があるということよりも明確である」と説いています。

ある臨死体験

立花隆著の『臨死体験』は興味深い一冊で、面白い体験談が書かれています。

ルーカネン・キルデという人が手術を受けます。その時、キルデ氏は天井から手術台に横たわっている自分を見るのです。非常に不思議な状態で、医師の心まで読めたそうです。いざメスが体に入るとき、「そこには動脈がある。切ったら大変なことになってしまう」と叫びましたが執刀医には伝わりません。血が吹き出た瞬間、場面がガラっと変わって、トンネルのような所をスーっと上がっていきます。

そこは偉大な意志による愛に溢れた場所で、自分を温かく包んでくれている。そして次の瞬間、「ここに来るのはまだ早いから戻りなさい」との声を聞きます。そして気がつくと自分は病室にいるという体験をしています。

これは一例ですが、臨死体験者の多くは、その後の人生観を劇的に変化させています。体験者に共通するのは、物質欲が消え、精神的な世界、内面の向上を求めるようになっているということです。

心のままの世界へ

人は霊魂（精霊）と肉体から成り立っています。肉体は容器、容（い）れ物で、霊魂が人の本体である、と教えられています。死とは、心臓と肺が完全に停止した時で、その瞬間に肉体と霊魂が分離します。したがって心臓が機能している状態を死と認めることはできません。大本が「脳死」からの臓器移植に反対している根拠もここにあります。

人は死後、霊界に復活し、三つの「状態」をたどると説かれています。最初は「外分の状態」といい、生前の容姿をとどめています。次に「内分の状態」となると、心がそのまま容姿に表れてきます。ここが現界と大きく違うところで、時間の経過とともに霊界では必ず、その人の持つ本質、心がそのまま形（容姿）をとるのです。心の美しい人は美しく、心の醜い人は醜くなる。

しかし、現界は違います。どんなに相手を悪く思っていても、にっこり笑って「こんにちは」と言えます。しかし、霊界に行くと、それは通用しません。想念、心が、そのまま容姿となるから、ごまかしはききません。

こうして「外分の状態」から「準備の状態」を経て、霊魂はそれぞれ、ふさわしい霊界へと旅立つことになり、精霊はその霊界で生き続けるのです。

現界は修行の場

霊界は意志想念の世界で、いくら天国へ行きたいと思っていても、結局は自分の心のままの世界にしか行けません。逆に言えば、生きている間に、自分の中に天国を作っておかないと、死後の天国はありませんよ、ということです。そう考えると大切なのは、現界での生き方ということになります。

大本では「現界は修行の場」と教えられています。霊界には厳然とした境界がありますが、現界では、天国も地獄も混在しています。それだからこそ、修行には適していると説かれています。

個性がぶつかる日常

人間関係は、いちばん大きな修行かもしれません。考え方、価値観は、十人十色です。違った個性がぶつかるからこそ、さまざまな場面で忍耐しなければならない。また努力も必要となり、自分が磨かれていくのです。周囲の人たちと調和・和合していくことは容易なことではありませんが、そこに修行があり、それを通して心、魂を強く、大きく、きれいにしていただけるのです。

人と接することがなければ、修行もなく、また向上もないでしょう。

以前、出口聖子四代教主から、「人はなんのために生まれてきたと思う」と質問を受けたことがあります。私が答えに窮していると、「修行するために生まれてきてるんやで」と教えていただきました。「修行といってもな、辛いことばかりではないんやで。嬉しいことが半分、辛いことが半分。嬉しいことばかりが続くこともないし、苦しいことばかりが続くこともない。上ったり下がったり、いろんな体験させていただきながら、最後は霊界に戻っていく。霊界に戻ったときに、天人・天使となって、しっかりそこで働かせていただく。このために人は現界に生まれて修行しているんやで」と教えていただきました。

良い想念は天国を作る

良い想念、具体的には、「感謝」「喜び」は天国とつながり、心、魂をより豊かに、強くしてくれます。しかし、悪い想念「嫉妬」「恨み」「執着」などは、天国と反対の世界に通じ、自分の内面を、より小さく、醜く、弱くしていくことになってしまいます。

また、善悪いずれにしても想念は、大きなエネルギーを持ち、自分にも周囲にも影響を与えます。良いエネルギーは天国を広げ、悪いエネルギーは、それに相応する世界を広げていきます。

今、自分がどちらの世界とつながっているのか、それを知る唯一の方法は、良心に「省みる」ことです。省みるという行為なくして進歩・向上は無いとも教えられています。

良心に従って進む

現界にいる間、いちばん大切なことは「今、この瞬間」を大事にし、精いっぱい頑張ることです。可能な限り、上を目指して、一生懸命に進ませていただく。そして本当にしたいことをする。その結果、失敗してもいいのです。現界での失敗は、後に財産になりますから。失敗を恐れることはありません。

私たち人間は、例外なく神さまから〝良心〟をいただいています。大事なことは、常に自分の良心に従って進むことです。進みたい方向に、進んだらいいのです。そして違っていたら、またやり直せばいい。

ただし、事に当たり、人と接するなかで問題が生じたとき、必ず自らを省みるということだけは忘れないようにしたいものです。

掲載文は、平成27年4月15日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

現界は修行の場

紀元前から語り継がれる、死後の世界。
目には見えないが、確実に存在する。
天国へ行くために重要なカギは、自らを省みること。

東京本部直属信徒研修会

東京本部直属信徒研修会は、6月28日午前10時から、東京宣教センターで開催され、8人が参加した。

参加者は、講話「神まつり、みたま（祖霊）まつり」、「神業奉仕について」を受講したほか、基本宣伝歌、愛善歌の実習、茶席入席、お作品拝観などを行った。また、東光苑の祭典行事が紹介され、「総合質問会」ではさまざまな質問が寄せられた。

参加者からは、「大本の果たす役割はとても大きく、意義深いものだと感じました」などの声が寄せられた。

東光苑月次祭

東光苑月次祭は7月12日、午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、３４０人が参拝した。

祭員は茨城主会、少年祭員は茨城主会の成嶋祥吾くん、片桐聖翔くん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は佐々木武雄埼玉主会長、添釜は高野社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦大本本部長があいさつに立ち、7月8日の「開祖さま沓島ごもり世界平和祈願１１０周年・沓島・冠島開き１１５周年記念祭典」と、7月12日から15日までに行われた「道院台湾現地研修会訪問団」についての報告と「夏期学級や少年祭などの後継者育成行事を通して、少年たちに神さまのありがたさを体験していただきたい」と参加送り出しを呼びかけた。

緊張の面持ちで、自己紹介

続いて、「ＴＰＰ交渉について」と題して、猪子恒東京宣教センター次長による月次祭講話が行われ、「自給自足は世界的通義と示されている。少しずつでも実践すべきである」と述べ、〝農〟や〝正食〟のあり方についてお示しをもとに解説した。

次いで、藤本光総務管理課長のギター伴奏で合唱が行われ、愛善歌「瑞声」と「海」、「花は咲く」が斉唱された。

大本公開講座

第１４９回大本公開講座は、7月15日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、尾﨑泰良大道場講師が「芸術は宗教の母―大本の芸術文化活動―」と題して講演した。参加者は27人（内、一般5人）。

講座では、耀盌や書などのお作品を紹介しながら、大本の芸術観について述べ、「豊かな人生を歩むには、物を洞察する力が大切で、そうすることで日々の生活の中に本質がみえてくる」と説き、それが大本に多くの芸術作品が生まれた要因と結んだ。

作品には、匂いがあり音が流れている

参加者からは、「耀盌制作の経緯を聞いて、王仁三郎の心と信念が伝わってきました（女性・一般）」等の声が寄せられた。

東光苑道場講座

日　時 ９月２１日（月・祝）午前８時半受付
～２３日（水・祝）午後４時ごろ閉講予定
会　場 大本東京本部・東京宣教センター
参加費 １人３，７００円（期間中の食・宿泊費）
※資料「修行のしおり」（別途５００円徴収）
内　容 大道場講座初日から現代の大本まで
※但し、神苑案内と高熊山参拝を除く
申込み 食事・宿泊を明記の上、東京宣教センター愛善宣教課「東光苑道場講座」宛にお申込み下さい（定員２０人）
締　切 ９月１１日（金）必着

東光苑秋季祭式講習会

日　時 ９月２６日（土）午前９時より受付
～２７日（日）午後５時ごろ閉講予定
会　場 大本東京本部・東京宣教センター
参加費 １人１，０００円
※食事・宿泊代は別途実費を徴収します
内　容 初級クラス　基本動作から月次祭まで
中級クラス　大神鎮座祭・祖霊鎮祭・年祭・合祀祭など
申込み 受講クラス・食事・宿泊を明記の上、東京宣教センター祭務課「秋季祭式講習会」宛にお申込み下さい（定員４０人）
締　切 ９月２１日（月・祝）必着

東光苑祭典・行事予定

8月

7日（金）午前10時30分執行
開教１２３年 瑞生大祭遥拝祭

9日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

19日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題 なにが問題か「脳死臓器移植」「死刑」「尊厳死」
～大本の生命倫理活動～
講師 斉藤　泰（大本教学研鑽所事務局主幹）

9月

11日（金）午後7時執行
全国一斉世界平和祈願祭

13日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・長寿感謝祭・交通安全祈願祭・秋季合同慰霊祭

16日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題 「もったいない」精神に立ち返る
～大本のエネルギー・環境問題への提唱～
講師 山田　歌（大本教学委員）

21日（月・祝）～23日（水・祝）
東光苑道場講座

23日（水・祝）午前10時30分執行
三代教主毎年祭（25年）

26日（土）27日（日）
東光苑秋季祭式講習会

27日（日）午後6時
東光苑秋をめでる夕べ

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com